諸棵餘録後編 十九

御書院番

壱

内閣文庫
番號 和 16322
冊數 101 (80)
函號 157 127

内閣文庫
和書 類 二一三 號 三二一 冊 一〇一 架 一五七 函 三

諸牒餘録後編巻第十九

御書院番

自四番
至六番

日本政府圖書

浅草文庫

四番小笠原佐渡守組

一 嫡家小笠原修理大夫方ゟ　小笠原佐渡守

書付指上ル

一 嫡家脇坂中務少輔方ゟ　脇坂甚之活

書付指上ル

高千八百石　本国甲斐　祖父右京
生国武蔵　父右京　駒井右京

一　元和元乙卯年五月七日
台徳院様摂州天王寺表　御出馬
被遊候刻　祖父駒井右京事御書院番
青山伯耆守組ニ而御供仕候　城兵大野
修理同主馬等馳出御旗本近く
御先手合戦之節　鑓を合高名仕

城兵未盛之節度々鑓付能人を
打者ニ首とも打首捨場ニ被差置
大御所様ニ茂　御成御途中ニ而被遊
上覧誰某高名仕候哉と御尋ニ付駒井
右京高名之首持参仕候処即右
上意ニ首帳ニ書載候者之名をも
書付差上候様被　仰付候翌之年元和
二年辰正月九日於江戸為　御褒美
武州之内黒門村相州之内深見村

其所ニ而高三百石之御加増被仰付候
只今不勤仕候

高三千三拾石余　本国参河　祖父監物　生国武蔵　父道休　永井傳八郎

権現様関ヶ原御合戦之時ゟ祖父監物
御側を不奉離ニ而相勤殊ニ又人自
身生捕ニ奉入　上覧候于時諸軍
勢而ニ及放火候ニ付てと停止之旨

御直ニ監物ニ被　仰付早速停止仕候
働　御機嫌ニ被叶為御褒美
御手自御合頂戴仕候
台徳院様大坂御陣之節物見相勤候且
又　御直ニ被　御使ニ　仰付蒙
和泉守備江も三度之御使監物ニ
仰付右勤候以甚上黒門町早々
剣諸般働ク前尾　御機嫌ニ被叶
為御褒美　御手自御金頂戴仕候

一 嫡家之儀者同名万之丞方ゟ書付差
上申候

一 高天神ニ而 養祖父井鐵左近 生国参河 養父同治左衛門 生国武蔵 実祖父井鐵大隅 実父同新三郎 井鐵治右衛門

権現様関ヶ原御合戦之時分景勝逆心ニ付
祖父井鐵左近光隆義一門之者ニ付
被　召出羽表虎口之押ニ被　仰付

一 依御忠節申上候為御褒美常陸
國行方郡之内新文ト申所ニ而知行
三千石拝領仕候右戦場ニ而景勝
家之幕元ニ而取申候右幕之紋則
家之紋ニ仕候右之内一ニ三ツ星附来候
伯父井鐵左近光久 光隆嫡子 井合戸
右ハ寛永十年戌八月七日於武州
江戸死去仕候実子無御座死去仕候三千石
之 白上候迄到光久弟治左衛門御上総

之御供ニ而上京仕候右次第ニ候得共
養父ゟ修覆仕
一 実父方ゟ御尋之儀差出申候

合三人

近藤大隅
大久保勘三郎
倉橋七郎兵衛

本多次郎左衛門
松平三郎左衛門
天野勘左衛門
松平伊織
神尾平三郎
安藤図書
和田源左衛門
山田十郎左衛門
鳥居久五郎

近藤九兵衛
折井瀬兵衛
落合小平次
松平主殿
溝口傳四郎
細井源五郎
大久保喜八

合拾九人惣領家督上り候書上ル

長谷川九郎
阿部八之丞
伊藤安兵衛
戸田權兵衛
中根十左衛門
一色七兵衛
多賀三右衛門
押田弥太夫
井戸甚助

大森半七郎
須藤次郎兵衛
瀧川久三郎
松平新兵衛
神保長左衛門
矢沢（部）新五兵衛
大久保権兵衛
瀧川清右衛門
戸田数三郎

宮崎采女
柳沢長兵衛
筑紫右近
横瀬左門
本田藤兵衛
戸張八左衛門

合弐拾四人御書付之趣不相替候

惣人数合拾八人 但シ 番頭組頭共

御所ゟ之番同心共 番頭組頭組中

之義某可申上旨被仰出候以上

貞享元甲子年閏春 小笠原佐渡守

阿部豊後守殿

堀田下総守殿

大番 秋元隼人正組

御書付之趣先祖書差上候写如左

秋元隼人正

岡田備後守

御書付之趣先祖書差上候写如左

高千七百六拾石 本国参州 生国武蔵 祖父名吉兵衛 父名吉兵衛 太田甚四郎

曾祖父御当家江罷出之事

一 太田甚四郎吉勝 後号吉久丈
権現様江十八歳の時より御奉公仕候
味方ヶ原御一戦乃後武田信玄帰陣
之刻遠州堀江の城台押寄の時
中安兵部ト申者外曲輪を捨て
二丸まて下防戦也申候甚四郎申候は
外曲輪を捨て引取候は敵勢ニ而
家也申不有仁甚意堅固ニ守護
仕候故首尾逢上聞ニ多作生尉ニ為
御褒美並大夫拝領仕候

一 権現様水野下野守居城之刕緒川
刈谷へ御働被成候時日の内二度之
戦ニ甚四郎一番鑓仕候又緒川之日同
場のまて御働 おゐて城下十八町と申所ニて高名

仕候右両人同場ニて首ニ者 矢田
作十郎 太田源太夫ニて御座候事
一 権現様遠州懸川の城御責被
遊候時根小屋放火大風成候處城中江
仰出候所酒井与四郎と放火へ仕
候者甚四郎被致、其上御前ニ被 召出
被 仰付候之處無相違焼拂申候
事
一 江州姉川取合戦目の同太夫の働ニ

首を討取申候事
一 遠州堀江の城ニ而去ル亥年武田
信玄味方ヶ原へ発向の時堀江の
城下と押通申候と甚四郎馬上
の者一騎射落申候事
祖父ゟ譲受之事
一 太田甚四郎 吉正 後号若太夫
権現様遠州高天神一戦の刻十八歳

以て朝比奈小平太と申者と組討
仕候事
一　遠州二俣ニ而武田勝頼出張の時
安倍治兵衛と長巳郎一同ニ鑓を合
申候事
一　同国立花ヶ谷
権現様御働被成候て朝安倍治兵衛と
長巳郎一同ニ鑓を合申候事
一　同国高天神ニ而一戦の節忍入の
場共生捕乃場ニ而仕候事
一　同所ニ而仕寄付の時御方崩申候
之節鑓并治兵衛と長巳郎致候事
一　尾州星崎ニ而蟹江の城より後詰
の仕懸中ニ而史条候と討留申
候事
一　関ヶ原ニ而一戦之刻
台徳院様ニ而安房守居城信州上田
御出馬被遊候時染谷ヶ嶽ニ而手先

一第武者押被　御前上覧之
刻太田甚四郎　鉄炮ニ今の大の
字之差物　御目ニ入候て候と
大分推参ニ而御座候程能差物と
差候也
御意被成候翌日御馬廻拾八人
前田之目付被　仰付候中ニ勤有之
小幡次郎右衛門　辻太郎助　溝口市左衛門
大田平次（平太田）甚四郎　右六人　酒井与兵衛

奥平美作守時分ニ入被差添前田
大和守之御部　敵城中より大将と
者見して黒羽織之者　十五六人計連
大手より出　堀ニ付出曲輪へ
先ゝ乗つて出候処ニ馬上三騎迄ニ候
於武者後ニ前田上総介是を見て
惣ニ其者ともやり三持つき上りて
向ふ候所　押付候しか候所を敵よりて決
帷子けしく分銭ゝ組の足路上り分懸

此時甚四郎弓をもつて諸目市九處迄
ミ多人諸とも二甚四郎矢貳本射
懸候に毛利酒井宮内大輔足軽衆
陶山内蔵助と申者諸とも押立
候ても陶山を始三十人餘渋枕を当
了討死候故新手甚四郎よろこ
の中へ走也爰に手虎口前へ参り
處二中山勘兵衛小池次郎左衛門辻
太郎助三人鑓をもつて石橋へ立恩

甚四郎弓を以引こまへ候ゆへ敵十文
字人形と出候中に朱鑓に朱さし物
し候者其先に追鑓を合し候者
後に荒左衛門と名乗し候甚四郎相
其場朱具足乃者射候ば
矢打先へあらそひ当座に相果し候若
後に安國と申者と名乗候又首巻
ミ鑓をもつ候者射倒し候是を九中
と申者と名乗候様此場鑓合

由在候之間右衛門助父郎黨刀を抜
山本民部と申者側走寄候と申
候時太郎助うちかゝり候ニ付と其流
ニ類いたし候武者寄申候処右衛門助
甲之綴へ懸つて彼所立危見候所を
動なから其流ニ類ニ武者と寄
申候時右衛門助譲につて候処を抜申
候ニ右衛門助下ニ居寄申候彼是殺
引続同三人之者御目落候得共か

然處子細無残候忍所後申の場所
とれ云ちにて引こしへ候処もちらもの
足よ矢を負申候処ちらもと妻もへ端
出し左ちよ仕源光異中明の紙
まらは者と射倒申候此者細抱橋本
と申候能所ニ諸目市ニ逢走出紙を合
の節意心所立寄て市之丞へつよ云懸
とうけ亦矢とたうひ候時敵行候ニ
よ川さく来小泉のわつれ仕悉心所後

候といへとも柵際より巳拾間ほと
味方の方へ※戸田半平ニ追かけて付
大屋権右衛門為上使右之者共召連
御本陣へ参候ハは彼先手の輩ニ
御穿鑿の上御軍法を背キ不届
事ニ被思召中山勘解由・小笠原
辻右京助・夏目市左衛門・戸田半平・太田
甚巳郎此外牧野右馬丞手ニ而致候
久左衛門・飯倉藤十郎都合八人右馬丞

小谷附城信州わつまへ差越翌年
九月被召出甚巳郎儀右真田表為
御褒美与加増弐百石下総国の内
神保郷・反能郷・荒野村ニ而拝
領仕候其外朱印下之候之大坂表御陣
其之示ニ御書記候太?茶まて
甚巳郎ニ被対候細地懐ニ助候
と雖被対様作矢を致養生存
命ニ而渡ニ甚巳郎寸へ参矢疵等

其節又被射候矢とも持参仕候
其内にて甚五郎討申候矢何茂
羽中ニ名を書印申候故紛ニ無御
座候此時其内表之儀様子分ニ無
之内談仕候ニ付城中働候者之名
を承申候右其内表ニて討申候与
者
台徳院様より拝領仕候ニ今以当甚
四郎所持仕候

一 大坂夏の御陣惣先手之御陣触
と被仰付候る五月二日より六日之
期を廿日計日ニ及 御本陣へ被
召候て云上仕候 上意ニは骨を折候
休足可仕由 上意被成候且又若党
和泉守ニ可献と対陣仕候る加勢と被
仰付被成思召御使番誰とてもと
上意之時安藤対馬守若党とう
御座候由上候得ハ 御意ニは今朝よと

畢と存候處御用捨之由ニ而不及候
定而對馬守ヶ様之時の為ニ而可有之候而
御引取ニ而被成候由被申上候而若年寄
と被申出候堀田和泉守申合候て
候ハヽ統加勢と見しくつらひ申付敵
御手之人数於不足ハ一戦仕をし申候
在之候て氣ともの家　上意則
御前ヘ之處被申候處　榊原式部大輔
人数被召出候處帰り候と見て　酒井雅楽

大輔松平丹波守か申しけるは右之段
道ニ付彼是人数被混乱候て如へ
若年寄ニ而大事之氣なと申ける其
下知分也申候へは丹波守何とて此
大人数早速召出し事ニ申候若年寄
申候は若年寄之馬験とも之備場へ御
られ様なるへきの旨申付但其之
若被不知候へは側衆ニ人数有之候
その時又内大輔丹波守ニ堀田和泉守

一

手之衆加勢有之候ニ付無勢ハ少も
とろんく敵引上申事

同年五月七日高名仕候 御感成御陣

以後御旗本中大坂表働之御穿鑿

の刻首其後不及申候の名家

上意其上御旗本高名乃者共の證

人ニも成候事

右大坂表為御褒美御加増六百石

相州之内恩名村 柳沢村熊坂村總

出之内市の谷村ニて拝領仕候大小田

表働之御褒美ニ拝領仕候貳百石と

大坂御一戦以後御褒美ニ被下置候

六百石ニ本知相模國愛甲郷貳百

石と合千石外ニ又免六拾石ニ而も

高ニ成候ゟ取合千六拾石

大猷院様御代一紙之 御朱印ニ而被遊

被拝領頂戴ニ今所持仕候事

御朱印之写

相模国中郡下河入村弐百廿石
愚名村弐百六石高座郡西郷郷
弐百廿石下総国葛飾郡一谷村
弐百石友能郷六拾三石神保郷
五拾五石弐斗餘印旛郡荒野村
八拾三石七斗余都合千六拾石之事
令扶助之畢全可知行者也
寛永二
十二月十一日御朱印
石田若狭とのへ

高八百石　本國伊勢　生國武蔵
祖父次郎左衛門父次郎右衛門　小野次郎右衛門

祖父御門獲奉之事

一 小野次郎右衛門忠明

権現様御代中務と以被為　召抱く
先手御供仕大坂冬年御陣ニ
軍監職ニ御役被　仰付之
年夏陣ニは神谷七郎伊東

新十郎山角又左衛門石河市左衛門
同役ニて惣御弓鉄炮之支配
被 仰付候右之者共番次郎左衛門
召持仕候
台徳院様関ヶ原 御出馬之刻中山道
御発向被遊真田安房守居城
上田ニ御取懸被遊候染ヶ谷臺
より 御軍之
上覧被遊翌日苅田可有之中山

勘解由辻太郎助太田甚四郎浅目
市左衛門戸田半平朝倉藤十郎小栗
次郎左衛門右之者共酒井宮内大輔奥平
美作守両備へ被 仰付候苅田之
半ニ仕出候処城中より安房守子息
太郎左衛門まて出し候畑まて出申
中候処右之者共馳向候祖父小野治左衛門
忠明後号ス真田方之宮川左衛門
山本清左衛門此両人と槍を合申候

辻太郎助も池加ひ左右へ二人の者と
せり合玄蕃清右衛門両人たちまちに頭
引取申候處玄蕃筒井虎口際まて
倒申候二之丸兵部池と次郎左衛門まて
元此池今不相住候首取へ申し太刀打申
申候得も太郎助も相續き申候而天
敵大勢池加り池元たけし候太郎助
志ころへ實踐申候而中山勘解由
馳来り太郎助を實申候黄漆の頬當

仕候武者と勘解由實申候太郎助
志ころへ入り申候池掛申候太田長五郎
弓にて敵數多討倒し申候右二人
の者乃之池相候強て成ム橋と鉄
門迄急まて働申候然所よ須目市左
敵中へ乞申候へは先石真田方か
武者一人とひ出市左衛門と渡
合申候其甚四郎射倒し申候その後
八敵引入申候手せり合は無之候

右真田表之儀御軍法と相背御働候ニ付
信州わりつまへ引返し候内真田
表之儀際之牧野右馬允申上候ニ付
翌年九月被 召出其上御加増
として貳百石宛大坂者共被下
祖父小池次郎右衛門并上総之武射郡
本須賀村ニて貳百石御領知仕候

本多豊後守
近藤源兵衛
諏訪宗右衛門
大久保甚右衛門
松平十郎左衛門
木下長兵衛
松平助四郎
松平理兵衛
西村清左衛門

三枝権左衛門
筧半之丞
大久保半之助
右拾弐人者嫡家方より申上候ニ付書上
不申候
米倉忠右衛門
祖父助右衛門方より申上候ニ付書上不申候
高嶋蔵兵衛

梶川十兵衛
久世権之助
右三人養父方ニハ無之候ニ付實父方
嫡家より申上候ニ付書上不申候
曽我又左衛門
小幡又兵衛
富永主膳
中川龍千太

久貝忠左衛門
根来五左衛門
遠藤平十郎
石尾七郎左衛門
高門九次兵衛
大草三郎左衛門
早川又平巳郎
金山半左衛門
小林介左衛門

伊丹源太左衛門
森川周記
大屋忠兵衛
平岩弥次左衛門
石巻三九左衛門
瀧川三九郎
酒井縫左衛門
秋田八郎左衛門
花房要左衛門

市岡久三郎
保々孫三郎
松崎彦太郎
青山市之丞
吉田小兵衛
長井金十郎

右八人者御門書付之趣先祖ゟ書記候

惣人数〆拾八人　書役組頭

一　御鉄炮与力同心并書役組頭組中之家来又ハ中間下男ニ右同前ニ候也

貞享元甲子年
四月廿五日

秋元隼人正

秋元隼人正組

曽我又八郎

高弐千五百石　本国相模　生国武蔵
祖父丹波守　父又八郎

一　父曽我又八郎近祐
台徳院様御代寛永四年冬於西之御丸
植村源九郎喧嘩之刻為御褒美
於下総国小金領ニ而知行拝領之仍御
書出し御朱印不持仕候以上

御朱印之写

下総国小倉領藤心村百三拾八石
七斗余酒井根村百九拾三石四斗
高柳村拾弐石七斗余新宿村沼指
七石壱斗余以上四百壱石余此外
百貳拾石六斗余事令扶助之訖
全可知行者也

寛永八
三月四日御朱印

曽我権左衛門とのへ

六番　酒井壱岐守組

一 高四千石　本国三河 生国武蔵
祖父備後守 父を波守　酒井壱岐守

先祖之儀嫡家酒井河内守方ゟ
上ニ付書上申候故不及記

一 高千五百石　本国三河 生国志摩
祖父作左衛門 父志摩守 養父兄三之助　内藤十之丞

先祖之儀内藤紀伊守之兄内藤外記

方ゟ申上以前書上ヶ申候ニ付不及

一 高千石　本国三河生国武蔵　祖父対馬守父三郎兵衛　酒井与次郎組　天野三郎兵衛

曽祖父　天野三郎兵衛康景由緒書

一 権現様御六歳之御時尾州江御渡小
御供之衆ニ奉仕候初而御小姓之人数小

召人加り七人ニて相勤候其時名右衛
又五郎と申候又五郎儀十一歳ニて三人
之内ゟ罷出仕候
御八歳之御時駿州江入御被遊候
御拾九歳之御時迄被成御座候相
詰三河御入国之節ゟ度々之御合
戦有之働申候三州東條之城指置
御手ニ入候様被成候而も御右筆仰付
関ヶ原御陣以後大坂西丸

御居城之城数十ヶ所在之候仕
之時ニ依 被命相渡候事
組参州東條 長篠 吉田 遠州
掛川 駿州田中 江尻 興国寺
伊豆下田 武州八王寺 尾州清洲
小牧 荒田 鯉江 勢州 濱田 大坂
西尾ニ候事

一 權現様三州ニ御座之時永禄六
癸亥年國中之一向宗一揆蜂起
て奉逆 其外衆等も一向宗ニ
候得共依 上意改宗旨浄土宗ニ
成申候付 被抱 御感一揆退治
之本多作左衛門懸仕一揆大将分之馬場
小平太と申者ニ候因弥陀二寸五分之
尊像頸首掛磨候作之也 仰ニて
御手自被領頂戴仕千今有之事

一 權現様於江州姉川朝倉義景
御合戦ニ得 御利運之時 御身近ク

敵築来ル下討取ル奉　御天野
之節ニ而加藤喜助池東而手ヨ馬上
にて彼敵ヲ相戦討取節御馬袋
血ヲ掛ヶ申候此時討漏すはて被下
御手ニ被思召御鎗之柄ヨ御手と然
ら遊さるへき被遊　御覧候御鎗
をさ抜さるへく御潮なより一尺二三寸
上ニ血付り候を渠等敵と斬ル
下為召る　上意之由ニ候事

一　遠州味方ヶ原ニ而御合戦之時分御評
見仕御目通ニ而合之馬躍武者馬
上にて逃付申候事

一　同所御合戦之時分弓取て敵を人
歩立ニて塚之縁よりて　公之御傍を
思来千時因幡此節承ニ横合よりて
見付弓取有之辞と戦申ニ付
康家見出し則馬上ニて追かゝり家材
中川くりヲと次踏倒敵逃退申事

一 同所御合戦以後濱松城ニ入御被持
庄左衛門天野三郎左衛門奉 仰警固
大手之門ニ而度々言上僅ニ鉄炮十六
挺ニ而乗込して於犀ケ崖放炮致
敵陣信玄刑部ニ被陣了処ニ鉄炮之
者と集ニ得大ニ逆気取自分之侍
石川源九郎三浦加左衛門を有合之衆
梅村将監味墨勘左衛門野沢九大夫
市川久左衛門ト都合十六人ニ而連鉄炮

出放究為打候ハ早ク心付ける旨被
成 御感為御賞参州渥美郡
之内栄馬中山安村御領被下候事

一 遠州天方ニ而討敵首取候事

一 伊賀路 御下向之節 御跡見ニ仕候
御陣持参仕候之旨言上又ニ而遊
御感則 御陣ヲ頂戴 御跡見仕候
野伏小競衆と追拂供奉仕候事

一 駿州江尻之 御城代より被召置第

一 沼津御城代松平周防守ニ差別蓮山
表備之割致加勢ニ而為御褒美
兵糧之子儀被領仕候事

一 尾州長久手御合戦之時御旗本
より先達池田勝入父子相戦之ニ而御
先手危及御馬廻之兵相働候
掛合候處之敵敗軍異其節
先拘之武者又は次人と云々て
實例中候事

一 越前國本國許ゟ御出張之時御先手
前敵發來場所一方ハ山岸一方ハ
後也山之方ゟ居浦浅と持敵ハ辞
と懸而待而有處一町程隔而
中ト
權現様御馬を立ニ依而其御知
敵不懸来雙方相引候尾御備之御事
之外被遊御感御褒美之兼
傳候事

一 権現様従大坂関東江御下向之節
於御旅所上方大名関東江奉窺之儀
萬端令指図候下知申之旨被
仰大坂西丸為御城代江戸元近辺以後
関東江罷 百姓下々中之者ニ迄無遠慮
相渡申候事
一 関ヶ原御陣之砌も江戸西丸御預
御万様江申付被仰付御留守居仕候事
一 権現様より天正十年之御朱印
之写

下総国香取郡大須賀領之内押堀
之千石并山林竹木等為出置之条
永代令知行者也仍如件

天正拾年
二月朔日 御朱印

天野六兵衛とのへ

一 権現様ゟ慶長七年之御朱印
之写
知行方目録
一 駿河国駿東郡興国寺共二ヶ
村七千弐拾石八斗
一 富士郡吹津七ヶ村弐千九百六拾九
石弐斗余合壱万石之事
右令扶助訖全可致知者也

慶長七年正月廿日 御朱印
天野三郎兵衛とのへ

一 慶長六年辛丑二月駿州興国寺
城主ニ被仰付高壱万石拝領并御
領弐万石余御預ヶ被成候事

一 高七百石 本国三河 生国武蔵 実祖父郡比宗左衛門 実父同長左衛門 養祖父多門縫殿介 養父同傳八郎 酒井丹波守組 多門傳八郎

養祖父

多門縫殿介信清由緒書

一 天正十二甲申歳尾州長久手御合戦之節
権現様御馬前ニ而敵之騎討取首仕
二ツ討取申候其場ニ而渡邊忠右衛門尉
御目次前吾證尉加藤喜左衛門尉存居
則御前ニ而右御感之為御
褒美御家門之御紋頂戴仕今
所持仕候

合弐人

嫡家ゟ書上ヶ申候分

一 権現様ゟ先祖永田源兵衛御書被
下置候処、永田ハ数度子家ニ而出火在之候ニ付焼失
相成候ニ付数方ゟ申上候、并書上ヶ不申候

酒井左衛門組

永田源兵衛

一 先祖之由緒書ハ牧野内膳方ゟ申上候

同人組

牧野藤次郎

一 権現様ゟ養先祖永見彦兵衛ニ
為御褒美御朱印三河国ニ而空穂ニ而被下置候処
永見甲斐守方ゟ申上候

同人組

永見権七郎

一 広忠様ゟ先祖内藤長三郎へ
被下置候御朱印紀伊中納言殿家中
内藤甚左衛門方ゟ中納言殿ゟ申上候

同人組

内藤又三郎

一 権現様ゟ祖父曽我又六郎へ御書

同人組

被下置以来曾我又左衛門方ゟ　　曾我権左衛門
申上候

一　先祖由緒書之儀渡辺源蔵方ゟ　同人組　渡辺七郎左衛門
申上候

一　権現様ゟ曾祖父安部大蔵へ　同人組　安部次郎兵衛
御感状被下置以来安部摂津守
方ゟ申上候

一　権現様ゟ養祖父石河三左衛門へ　同人組　石河藤左衛門
御知行被下置以来石河藤九郎
同三左衛門方ゟ申上候

一　権現様ゟ祖父天野弥兵衛へ　同人組　岡部兵部
御旗本之御加増被下置以来父
佐右衛門方ゟ申上候

一　権現様ゟ祖父山田十兵衛へ

一 若御慶長御加増ニ付
下置候由山田十大夫方ゟ
申上ル
同人組 山田孫大夫

一 権現様ゟ先祖ニ若御
慶長御判物頂戴仕候由
内匠殿方ゟ申上ル
同人組 建部甚兵衛

一 権現様ゟ曽祖父初鹿
伝右衛門ニ御證文御書
頂戴仕候由父伝右衛門方ゟ
申上ル
同人組 初鹿野伝四郎

一 権現様ゟ先祖天野清兵衛ニ
御先判御判物頂戴仕候由
父惣右衛門方ゟ申上ル
同人組 小川左兵衛

一 権現様ゟ先祖御感状

一 頂戴曽祖父細井孫左衛門
右者御褒美御指添下置
候細井孫三郎方ゟ申上候

同人組
養父(?)之左衛門(?)
成瀬孫九郎

一 先祖由緒書之儀森川
今庵方ゟ申上候
合拾弐人

同人組
森川市左衛門

酒井左近組
筒井内記

同人組
三井十左衛門

同人組
美濃部治郎左衛門

同人組
久松市左衛門

同人組
前場久三郎

同人組

廣戸木工進
同人組
伊丹若書
同人組
平岩今之進
同人組
山田源左衛門
同人組
森川勘左衛門

同人組
伊奈長夫
同人組
神尾勘八郎
同人組
曽根平左衛門
同人組
平山小之進
同人組

青木又左衛門

同人組
三浦甚五兵衛

同人組
石川三左衛門

同人組
深沢源右衛門

同人組
和田源太夫

同人組
鈴木孫四郎

同人組
石谷九八郎

同人組
三宅六右衛門

同人組
服部三右衛門

同人組

同人組　横山主殿

同人組　松田伝右衛門

同人組　鈴木源左衛門

同人組　遠山内記

同人組

同人組　鵜沢八郎兵衛

合弐拾九人御門書付之通取持不仕候
申上不審者無之候

惣人数合四拾六人

酒井左衛門尉
芳賀源市郎

母方曽祖父
長沼助兵衛由緒書

一 甲州勝頼ニ而物頭仕罷在候勝頼落居之後
権現様ゟ長沼助兵衛儀御門番被為

其以後ニ助右衛門相果申候ニ付
助右衛門儀
権現様ニ茂為召出之御陣相
勤天正十年十一月六日ニ御朱印
頂戴仕御奉公勤仕寛永六年ニ病
死仕世倅七郎駿河大納言殿ニ御
奉公仕候處其刻牢人仕其後松平
大隅守殿ニ罷成病死仕子孫絶七郎
儀私母方へ右之御朱印所持候ニ付
私ニ相渡于今所持仕候
御朱印之写
甲州小尾之内定納八拾貫文同
丈之人高白之内定納五拾貫文
西郡宮源ちゝ分拾八貫文市川之内
拾弐貫三百文目私八貫文同丈之人
夢河内貫文并名田拾貫出
被
海宮木之事右如本領領掌不可有

相違源内式部丁拙者借之状併
天正十年
十月廿日　御朱印　并同七九郎遣之
菅沼助之丞殿
御預ヶ之分同恩再　番頭組頭組中之
家来書上ヶ申候外ニ申上候ハ無御座候以
以上

貞享元年
子八月廿七日
酒井丹波守

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan